

2024年度

札幌日本大学中学校
入学選抜試験
【A日程(1月7日)】

国 語

試験時間 60分

1. 指示があるまで、問題冊子さっしを開いてはいけません。
2. 答えは、解答用紙に記入してください。問題は、～まであります。
3. 試験監督かんとくの先生の指示に従って、試験を開始してください。
4. 試験の途中で、トイレに行きたくなったり、気分が悪くなったりした場合は、手をあげて試験監督の先生の指示を受けてください。
5. 試験開始の指示があつてから、解答用紙に「受験番号」「氏名」を記入してください。
6. 解答用紙には、解答以外を記入しないでください。
7. 試験が早く終わっても、周囲を見回したり、横を向いたりしてはいけません。試験監督の先生から注意を受けることがあります。
8. 机の上には、筆記用具以外は置いてはいけません。風邪かぜなどにより、ティッシュペーパーを使用したい場合は、予め試験監督の先生あらかじに申し出てください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小柄で引つ込み思案な性格の蓮見宝は小学五年生の三学期に東京から転校してきた。がさつな阿久津善太に初めはすくんでいた宝だったが、共に同じ「くすのき剣道クラブ」に通う中で徐々に互いの心を通わせるようになっていった。くすのき剣道クラブで初めて大会に出場したものの、宝は自分がみんなの力になり切れず歯がゆい思いを抱いていた。そんな中、宝はプールでの出来事で善太とぎくしゃくした関係になり、剣道クラブに足が向かなくなっていた。以下はそれに続く場面である。

夜、自分の部屋で塾の宿題をこなしていると、廊下で足音がした。一步の間隔が広い。父親だ。宝がミカマえたところで、部屋のドアがノックされた。

「はい」

ここで間を取るのには許されない。そんなことをすれば、なにをしていたんだと父親はたちまち不機嫌になる。だからノックにほとんど意味がない。

ノブが回り、小さなキンゾク音がしてドアが開いた。

「宝。今日もくすのきに行かなかったのか」

片手に紙のタバを持った父親が X 顔で部屋に入ってくる。

『もう二週間以上サボってるんだぞ。いやなことがあったのかもかもしれないけど、だからって逃げちゃだめだろう。勇気を出して立ち向かわないでどうする！』

続くのはこんなところだろうか。黙って予想していると、

「道場、変えるか？」

降ってきた言葉に 宝はぼかんとした。

「くすのきをやめて、ちがう道場に通うか？」

冗談を言っているのかと思った。もしくは、それがいやならさっさとくすのきに行け、とつながるのかと思った。

でもちがう。この父親は本気だ。

①「ソツギヨウまで、あと、半年なのにな？」

(中略)

「阿久津くんと勝手にプールに入ってぶざけてたとか、稽古をいきなり二週間以上休むとか、明らかにおかしいじゃないか。今までの宝を見ていけば、なにかがあったんだってことはわかるんだ。悩んでるってことは伝わってくるんだ。でも、宝はお父さんにも、お母さんにも、なにも言わないで閉じこもる。だったら、お父さんはお父さんの考えで、動くしかないだろう。待っていても仕方ないし、放っておくわけにもいかないんだから」

放っておいてよ!

宝は、プールでの出来事も、稽古を休む理由も、なにも両親に話さなかった。善太に迷惑がかかるかもしれないのがいやだったからだ。なのに結局、めんどうなことになってしまった。

「今回に限らないぞ。お父さんがなにを言っても、なにを聞いても、宝からはなにも返ってこない。黙っていれば事が済む、周りがそれなりに動いてくれる、そう思って甘えているのは、宝じゃないのか？」

「甘えて、なんか」

②「どうしたいって意思表示もしないで、サツしてくれなんていうのは、甘えだ」

父親は表情も変えず、宝の否定をすぱりと斬り落とした。

③「宝は、誰に対しても、そうじゃないか」

父親の様子がいつもとちがう。声が大きくなって、全身からむだに熱を放ち、元氣だ勇氣だ情熱だと宝にインカさせようとする、あの芝居がかかった父親ではない。

④「淡々と、父親はあとを続ける。」

「ただ受け身でいればいいなんて思うな。それでやり過ぎせないことも、これからいくらだたて出てくる。剣道だつてそうじゃないか。守りを固めて待っていたって、試合時間はたった数分だぞ。その間に必ずコウキが訪れるとは限らない」

んだ。動いて攻めない。前にも言ったよな、『チャンスは待つな、作れ』って」

「……ごめ」

③ 謝ってほしいんじゃない」

父親の① シセンを、つむじのあたりに感じる。しばらくして、ため息が聞こえた。

「宝、シヨックだったんだろう」

おどろいて父親を見上げると、静かなまなざしが返ってくる。

「お母さんが撮ってきてくれた、この前の団体戦のビデオ、お父さん何度も見た。① ハンセイ会のあとも、ずっと見てる。

初戦の宝の相手、中学生みたいに大きい子だったな。よく一本取った。最後のほうの宝の動きは、とつてもよかった」

恒例のハンセイ会の際にも、同じようにほめられた。だけど喜ばなかった。

「でも、そのあとの阿久津くんは、もっとよかった」

宝は口を引き結んだ。そうだ。それが、わかっていたからだ。

「試合巧者な対戦相手に、まっすぐぶつかって行って、力で勝った。大将のプレッシャーもあったらうに、みごとだったな。

しかもあの相手は、宝が前に個人戦で二本負けた子だ。宝、見ててシヨックだったらう。今も、もやもやしてるだらう。

それは嫉妬だ。自分のほうが阿久津くんより上だって、負けてないって、宝は心のどこかで思ってたんだよ」

すうっと、④ 胸が冷えた。

確かにシヨックだ。

ずっと持て余していた感情に、勝手に、名前をつけられてしまったことが。

「ようやく、くやしいうって感じただらう」

そこで父親のスイッチが入った。前傾① シセイになり、両腕を横に大きく広げる。

「くやしいよな。だから宝は阿久津くんとかんかして、剣道からも逃げてるんだよな。その気持ちはよくわかるよ。でも

それじゃあだめだ。立ち向かわなきゃ。阿久津くんとはちがう稽古をして、負かしてやろうじゃないか。お父さんも協力

する。なっ。だからよその道場で」

⑤ 「くやしくない」

血を沸騰させる勢いで語っていた父親が、びたりと止まる。

「宝、まだそんなことを」

近寄ろうとした父親から、素早く下がって間合いを取り、両目の横を手で覆う。

「お父さんが、くやしがるから」

「え？」

「お父さんは、くやしがるしないで。怒らないで。がっかりもしないで」

遠間に立ったまま、宝は言った。

「ぼくよりも、がんばらないで」

剣道だけではない。宝の交友関係でも、勉強でも、ゲームにおいてさえ、父親は宝以上に Y し、あれこれと必死になっ

宝の立つ試合場に、いつもいつもいつも、父親が竹刀を持って入ってきて、ひどいときには相手を背中から斬ってしまうのだ。

そんなのはもう、宝の戦いではない。勝とうが負けようが、心は少しも動かない。

「それは、どういう意味だ？」

問われ、宝は言いよどんだ。舌が勝手に縮こまる。無理やり動かそうとすると、臆病な自分がささやいた。『いつもみたいに黙っていようよ』『きらわれちゃうよ』『お父さんがかわいそうだよ』と、何度も何度も。

でも、自分から声を出さないと。自分から挑んでいかないと。

それで流れが変わったのを、一度、経験したのだ。

顔から手を放し、父親を見る。心の中で構えた竹刀を、大きく振りかぶった。

「つまんない、よ」

⑦ 一刃。

父親はゆっくりと一步下がり、机に後ろ手をつけて寄りかかった。でも、宝から目はそらさない。また、終わっていない。宝は意識して、肩ではなくお腹に力をこめる。

「稽古、一生懸命、がんばるから」

「それで？」

「次の大会は、阿久津くんより、いい結果出す。負けない、から」

「だから？」

「だから、くすのき、やめない。お父さんの協力も、もう、いらない」

「いらぬのか。それでも宝は、強くなれるのか？ まっすぐ、元気に、勇敢に戦えるようになるか？ ちゃんと成長して、変わっていけるか？」

強い口調で畳みかけられる。⑧ 宝は首を振った。

「なりたいたい自分は、自分で、決める」

示されなくても、ちゃんと知ってる。

（落合由佳『流星と稲妻』講談社）

問一 —— 線部②〜④のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ———— X ———— Y に入る言葉として最も適当なものを、次のア〜オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

X ア 甘い イ 辛い ウ 酸っぱい エ 苦い オ 熱い

Y ア 自画自賛 イ 一喜一憂 ウ 言語道断 エ 起承転結 オ 一挙両得

問三 —— 線部①「宝はぼかんとした」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを、つぎのア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父親がいつもどおり理解できないことを言うと思っていたら、具体的に別の道場を提案してきたことに感心したから。
イ 父親がいつもどおり勝手なことを言うと思っていたら、自分のことを思いやる優しい言葉をかけられ嬉しかったから。

ウ 父親がいつもどおりの古い考え方が現れると思っていたら、別の道場に通うという新たな発想を提案され悔しかったから。
エ 父親がいつもどおりの熱血ぶりが出るのだと思っていたら、あまりにも冷静に接してきたので不気味だったから。
オ 父親がいつもどおりの根性論が出ると思っていたら、道場を変えろという自分が想像しないことを言われ戸惑ったから。

問四 — 線部②「そうじゃないか」とありますが、「そう」とは具体的にどういうことですか。四十字以内で答えなさい。

問五 — 線部③「謝ってほしいんじゃない」とありますが、父親に宝はどのようなことに気づいてほしかったのですか。そ

の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もっと練習すれば、強くたくましい剣士になれる才能が宝にはあるということ。

イ 機会は待っていて訪れるものではなく、自分で作り出すものであるということ。

ウ 相手のことを考えてから動くのではなく、宝自身が自分のために行動すること。

エ 宝が上達するために、父親としてすべての試合を研究し続けているということ。

オ 時間は無限には存在しないので、限られた時間を有効に使うべきだということ。

問六 — 線部④「胸が冷えた」とありますが、この部分の宝の変化について説明した最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父親に自分のいままで感じていたことを、的確に言葉で表現され、驚くとともに戸惑い始めつつあった。

イ 父親に自分の気持ちを指摘されたことで、普段の父親と違うものを感じ、頼もしさを感じるようになった。

ウ 父親に自分の気持ちを勝手に表現され、そのあまりの身勝手さに対し、反抗心を芽生えさせつつあった。

エ 父親に自分の気持ちを決めつけられたことが、宝自身の冷静な判断を呼び、自分と向き合えるようになった。

オ 父親に自分の気持ちを一方的に決められ、反発する気力すら失い、全てのことをあきらめるようになった。

問七 — 線部⑤「くやくしくない」とありますが、宝がここで言おうとしたのはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分は父親のように勝負だけにこだわるよりも、仲間とともに精神的に成長していくことの方が何より大切だと考えているということ。

イ 自分のことなのに、父親が感情的になったり勝手に動いたりしてしまうので、自分のことではなくなってしまっているということ。

ウ 自分のことを、父親が先回りして大げさに表現してしまうことで、自分の中での感じ方がだんだんと弱くなっていてしまうということ。

エ 父親が当事者の自分より先に、様々な感情を表に出すので、自分の本当の想い^{おも}がわからなくなり混乱するようになってしまうということ。

オ 父親は自分のことを一方的に逃げていると決めつけていたが、剣道から逃げているにはそれ相応の理由が自分にはあるということ。

問八 — 線部⑥「宝は言いよんだ」とありますが、なぜですか。その理由を説明したものとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父親は自分のためを思っ言ってくれているのに、それを自分が受け入れられず情けなかったから。

イ 自分の本心に言いたいことを言えるだけの表現力を持ち合わせていないことが悔しかったから。

ウ 父親が精一杯^{せいいつぱい}のことを自分に与えてくれていることが分かり、喜びに満ちあふれてしまったから。

エ 自分から初めて言い返すことで、自分も父親も傷つくかもしれないことが何とも怖^{こわ}かったから。

オ 今まで父親に言い返そうとしては反撃^{はんげき}されてきたことが思い起^{おこ}こされ、緊張^{きんちやう}してしまっただから。

問九 — 線部⑦「一刀」とありますが、この表現が意味していることの説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア これまで自分が父親に頼り、甘えながら生きてきたことへの決別。
- イ 父親のあまりに荒々しく乱暴な振る舞いを見かねたことへの反抗。
- ウ これまでの父親との剣道についての子弟関係を忘れるための清算。
- エ これからも剣道を続け、実力を高めていくであろう自分への期待。
- オ これからは人間関係で悩まず、自分のことだけで良いという覚悟。

問十 — 線部⑧「宝は首を振った」とありますが、このときの宝の心情について五十字以内で答えなさい。

次の文章は、幸田文の「髪」の一節です。継母が亡くなった後、「私」の手元に継母の身の回りのものが戻ってきた。以下はそれに続く文章です。これを読んで、後の問いに答えなさい。(本文は一部現代かなづかいやひらがなに改めてある)

身のまわりのものがそっちの家から私の手もとへ移されて来た。血につながる子でなく、縁につながる母だったから、どちらにもそれ相應のしあわせがあった。怨んだり憎んだりした、それだけなら易しかろう。怨み憎みのひまひまに愛情もまざるとなつて、さて人と人とのあいだはむずかしい。ははにも私にも本来似ている性格があったし、なんにしても長年育てたり育てられたりしていれば、たがいにあくの強いところには惹き惹かれて似ても来るらしく、したがってよくわかりあい底いあいもした。が、^①はははおとなの潜めた執念ぶかきをもつて対していたし、私は若さのやりてんぼうを振りかぶっていたし、絶えず相似から来る葛藤、乖離から生じる親愛がくりかえされてい、むしろ他人ならうまく行つたかと考えられる組みあわせだった。しかし、ははと子の不和反感は奥深い観念から発生するように見えて、じつは愚にもつかない日常の雑事・感情からはじまって堆積していた。だから、かつて毎日見なれ、今またしばらくぶりで見れば、ははの世帯道具は、^②どれにもこれにも古い傷を語るしみが再現のなまなましきを見せていた。箆笥がでくんとしていれば、不機嫌で食事もせずにすわり通していたははの強情さを思ひだすし、鏡がきらっとすれば、起って行き際にちらりと捨て眼を置いて行く癖をおもう。かと思えば、ばか大きいメリヤスの足袋が出て来て、それには神経痛を苦しめて三枚もこんな足袋を重ねていた気の毒さがよみがえる。白髪染めで黒く染まった櫛の歯を見れば、あれほど自慢だった髪の毛の美しさもうかんで来るといふものだった。親子といふもの、生活といふもの、その根強さ、ずぶとさが古い道具類に浸み透っていた。なまじいに古傷をまさぐられるような苦々しさは濃く、死の哀感はかえって薄く、^③からくた片づけはいやなしことだった。

赤い針さしが残っていた。むろん手製の、たどうのような形がちよつとばかり風変わりな出来だった。ははは手芸も器用にしたが、どういうものか日本風の針箱を用いない人で、いつもこの携帯用みたような針さしをつかっていた。赤い針さしはいつの間にか置き場所のないままに私の粗末な裁縫用具と同居していたが、私には私の潔癖があったし、家人もこれを使うともなく使わぬともなく、^{※7}あたり針さしはごろつちやらしながら、経つに早く、もう四年がたっていた。

「かあさま。ちよつと来て見てよ。これ見て頂戴よ。」声になにか本気な響きがあった、^④私は洗濯を捨てた。ちよつとも

早く見せたいために、すわった縁側から襖のほうへ向けてさし出した娘の手さきに撮まれて、えたいの知れないものが、射しこむ冬の陽を切りかえしてきらりきらりとしていた。

⑤ なあに、それ

見ると、いやなものだった。毛ともいえず針ともいえないものだった。無尽に絡みあった毛のかたまりから、毬のよう

に針が突き出ていた。のろのろとそこへすわり、見つめた。

「これをね、もう少し小さくこしらえ直そうとおもってほだいたんだけど、こんななんでもの、あんまり気味がわるくて——どうしようかと思っちゃって。」

⑥ なるほど、ほだいた赤いきれがあたりに散っていた。ゆるしを乞うような娘のまなざしが私を見た。

「こうすると泣くみたいなの。」へらで押さえられると、かたまりはかすかにきしんで音をたてた。ぞわぞわとこちらの毛あなもきしみそうなのを娘の手前かくすつもりで、両手にもみあげを押さえてこらえると、こわばりが筋肉を伝って這った。「何年になるのかしら、この針さし。」

私はだまっていた。三十余年、そう四十年に近いだろうか、ははが人には後妻と呼ばれて私にはままははになって嫁入って来たときから、私はその針さしをかわいいと知っていたのだ。折れた針、曲がった針、木綿針、絹針、蒲団とじ、メリケン針、これほどどっさりのものを呑んでいながら、上っ面は赤いきれを着てかわいげにいた針さし——だが。

「これ、あたしが片づけるから玉子はもうおよし。」見のこして、娘は次へたって行った。

⑦ 毒針のように用心してかかっているくせに、指は心の動きの猛々しさにひっかかって、たびたびちくちくとした。何度ちくちくしてもやめずに、一本一本抜いて行った。抜いても抜いても、かたまりはなおしんに固くしこっていた。からだのしんにぶすつと刺さって私にままつ子の針一本が、たしかに顛えていた。伏兵のようにつんと出て来たり、しぶしぶ押し出されて来たり、毛は針に噛まれ、針は毛に畳まれていらくしく、はてしなく思われた。

やりかけの洗濯もなにも忘れていた。完全に毛だけになったかと思うかたまりを、ゆっくりと、しかし大胆に、握ったり放したりして試み、私は満足だった。なごんだ気もちが、さらにその毛だまをも緩く解きひろげる作業をそのかした。ややあって緩みはじめた。そのときになってはじめて、それがははの抜け毛ではないかと気づいた。しずまった胸にまた思いがのぼる。ひっぱると毛は抵抗を感じさせ、のちに強靱にぶつとときれ、つづいて二本三本、長くひきぬけて来た。

ははの髪は自慢に値する髪だった。量、長さ、色、つや、申し分なくいなながら、皮肉なことに持主の意に逆らう髪だった。あまりに多くあまりに強過ぎて、ははの望む優しい髪がたには結いあがらないのだった。ふけ落し、白髪ぬき、その後は白髪染と、深くて行く齡とともに何度私は手伝わされただろう。はははその度にじれて癩を起したし、私も途方にくれて腹を立てた。

一本一本力余って緩い反を打ってねじれているのが特徴だった。よく確かめようとし、陽かげはもう膝をうっているのを、ほっと知った。

抜け毛に齡はないものだろうか。からだを離れて三十年の余も押しかがめられていたとは信じられない髪だった。多少の軽い癖がついてはいるものの、いま頭からとれて来たものとしてもさしつかえなかった。これが何万何千本みごとに揃って黄楊の櫛にすかれ、束ねる手から余ってこぼれた触感が、量感がおもい出される。

おやと思う。それが動いたようだった。風か？ 熟視し、それはほんとうに動いたのだった。陽に光りながら、ちよと癖になった個処で、ごく僅かに浮いて反るものようだった。かたまりの中からほかのを引きぬいて、ちよとそこにあった白い包み紙の上に置いてためすと、毛はやっぱり陽を吸うと夢のようにふわっと動き、若い女の伸びをするすがたがとっさに連想された。——火鉢のそばとか筆筒の隅とか——窮屈にころりとして——ほんの一寸睡りだけが深く寝入って——ふっと醒めて——本能的に頭だけをもたげて——見まわして——ずずと背なかですって畳を漕ぐ——幾分胸や腰が浮いて、爪さきから指までの線がぎゆうと張る——び、び、び、と快さが走る——力が落ちて胸のカーヴが元のやわらかい平安にしずまる、そんな姿をまどわせて毛のかがまりは伸びをした。

若かったははの寝姿、夏などよく簾の蔭で寝入っていたその姿、竹に雀の模様のゆかたを着ていたっけ。

そのははは、くるっと畳に手をつけて、むこう向きに起きあがった。髪に手をやって、にこっとこちらへ振り向いた。機嫌のいい時にする、おどけた笑顔でこちらを見ている。「よかったわあたし、もうままははじゃないもの。」そう云った。いえ、そう聞こえたようだった。④ いいえ、それも違う、私がそう云わせたんです。でも、声はほんとうに天から降って来た、ほんとうに。

白いカーディガンの玉子が、ちいさいガラスのあき壇に、そのおびただしい針を詰めて、匂いのある油をさしている。「埋めるにしても流すにしてもねえ——」

冬の陽のなかに私はからだばかりをぬくぬくといて、げそつと気もちが削ぎ落とされていた。
「この毛、どうしましょう。」

「そうねえ」と濁して、私はいつも自分たちの始末する通りに、^⑩風呂の火の盛んなときにくべようときめていた。燃えさかる火には威厳があるものだった。威厳のもとに人知れず委ねて、無に送りかえしたかった。そしてそうした。針はいまだにそのまま私の針箱に入れてある。

ははは「ままはは」という縛られから、にこつと笑って、はっきり脱け出て行ったにちがいない。私もどうに、「ままっ子」から解き放されていたはずだった。おもえば長いような、また短いようなつながりだった。死なれたのちの親子のつながりというものは、生前にくらべて、おそらく較べものにならないほどの遥けさになお続くのだらう。

（幸田文「髪」「黒い裾」講談社

ただし出題の都合上、一部表記をあらためたところがある。）

- *1 やりてんぼうを振りかぶって……やりたいほうだいして。
- *2 乖離……離れたなれになること。
- *3 でくんとして……大きくて重みのあるものがたれ下がるさま。
- *4 メリヤス……伸縮性のある織り物の一種。
- *5 針さし……縫い針を刺しておく道具。針がさびないように中に綿や毛髪を入れてつくる。
- *6 たとう……たとう紙のこと。折りたたんで包む紙。
- *7 あたら……もったいなくも。
- *8 無尽……かぎりがないこと。
- *9 後妻……妻と死別などした男が、そのあとで結婚した妻。
- *10 蒲団とじ……ふとん針。ふとんに綿を入れた口をとじる時や、綿が動かないように飾り糸をとじつける時に使う長い針。
- *11 伏兵……敵の不意を襲うために、ひそかに隠れている兵。
- *12 黄楊の櫛……常緑の低高木。くしなどの材料にする。

問一 — ① 「ははおとなの潜めた執念ぶかさ」とは
どういうことですか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア その場が過ぎると子どもは忘れてしまうことを、大人は覚えていて、また蒸し返すということ。
イ 子どもが反発するようなことを、大人は心にしまいこんで表には出さないでいるということ。
ウ 子どもが気にもとめないことを、大人は大ごととしてとらえて、何度もしかりとばすこと。
エ 他人同士の関係というより、親子のように深い感情のもつれを持って接していたということ。

問二 — ② 「どれにもこれにも古い傷を語るしみが再現のなまなましさを見せていた」とありますが、「古い傷」とはどのようなことをたとえたものですか。本文より十字以内でぬき出して答えなさい。

問三 — ③ 「がらくた片づけはいやなしごとだった」ありますが、なぜ「いやなしごと」だったのですか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 遺品にふれると、ままははとの懐かしい記憶が思い出されて悲しくなるから。
- イ 遺品を見ると、ままははとうまういかなかった気持ちを出すから。
- ウ 遺品から感じる母の神経質な性格が、今の自分の気持ちをあらだてるから。
- エ 遺品に染み込んだ生活の記憶が、道具類についた傷として残っているから。

問四 — ④ 「私は洗濯を捨てた」とありますが、具体的にどうすることですか。次の文の□に当てはまるように、本文より五字以内でぬき出して答えなさい。

洗濯を□にしておくこと。

問五 — ⑤ 「なあに、それ——」の「——」には、「私」のどのような思いがこめられていると考えられますか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 娘の見せたものが始めから母の針さしだと気づいていたが、娘に気づかれてしまい、何とか無視しようとしている。
イ 母との記憶をつなぐ針さしだとすぐに気づき、娘に当時の中の悪い親子の関係を伝えづらく、言葉に困っている。

ウ 母の使っていた針さしだと気づいたが、なんとなく娘には母の話をしたくなく、言葉をつまらせている。

エ 母が髪の毛を巻き付けていた針さしだと気づいたが、娘にさわってほしくなくて、どのように言おうか迷っている。

問六 — ⑥ 「なるほど」とありますが、「私」は「誰がどうしたこと」について「なるほど」とわかったのですか。五十字程度で「こと。」につながるように説明しなさい。

問七 — ⑦ 「毒針のように用心してかかっているくせに、指は心の動きの猛々しさにひっかかって、たびたびちくっとした」とありますが、「私」のどのような気持ちか描かれていますか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 親子関係がこじれて、ままははに自分が毒づいていた頃を思い出し、自分の態度を後悔している。
イ ままははが、自分に対して厳し過ぎるほどの接し方をしていて記憶が忘れられないで、憎しみを持っている。
ウ ままははとの気まずい関係を思い出したくはないのに、その記憶があふれ出てくることを嫌に思っている。
エ ままははながら、自分の痛いところをついてくれるような教育をしてくれたことをとても感謝している。

問八 — ⑧ 「痲を起こしたし」とありますが、「痲を起こす」という意味ですか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 少しのことでも激怒する
イ ささいなことに手段に迷う
ウ ちよっとしたことにとだわる
エ たわいないことにおびえる

問九 ——— ⑨ 「いいえ、それも違う、私がそう云わせたんです」とありますが、ここから読み取れる「私」の気持ちとして

最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ままははが残っていた針さしをほどこ時間の中で、ままははどのいやな思い出ばかりが思い出され、都合のいいときだけ笑うままははのいやな部分を改めて見つめ直している。

イ 針さしの中から出てきたままははの毛を見ているうちに、若かった頃のお互いのやりとりを思い出し、ままははとままっ子のようなすれ違いの関係ばかりではなかったと思いはじめている。

ウ 針さしの中に隠されたままははの毛はピンとしていて、まっすぐに自分にぶつかってきたままははの気の強さと共に、自分を見捨てるように亡くなったままははを改めて悲しく思い出している。

エ 針さしを分解する玉子の様子を見ているうちに、ままははと自分の関係を思い出し、大人になった今、厳しかったままははのことを忘れようという気持ちになりかけている。

問十 ——— ⑩ 「風呂の火の盛んなときにくべようときめていた」とありますが、なぜこのようにしようとしたのですか。最も

も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 切りたいと思っても切れなかった母とのつながりを切ることで、その時だと考えたから。

イ 自然の力を利用することで、死んだ後も感じていた母とのあたたかい思い出に別れを告げようと考えたから。

ウ 自分の意志をこえた力に任せて、ままははとままっ子というしがらみから解放されようと考えたから。

エ 娘とのやりとりで親子の絆を改めて問い直し、自分とままははとのつながりを改めるよい機会だと考えたから。

問十一 この文章の描き方と内容の説明について、最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 独特の擬音語を使うことで、他の人とは違う自分の感性を強調し、「ままはは」との関係の独特さを描こうとしている。

イ 針さしをほどこ中で出てきたままははの毛を見ながら、ままははへの気持ちやゆるむ様子と重ねて描こうとしている。

ウ 年を重ねることで、自分がなくなってきたままははに似てきていることを、針さしの髪の毛に託して描こうとしている。

エ ままははの厳しいしつけを針さしの針にたとえる一方、おらかな生き方をままははの毛を通して描こうとしている。

下書用紙

